

荒魂 文明への警言鐘

京都大こころの未来研究センター教授(宗教哲学)の鎌田東二さん(60)は神道に詳しく、どこの神社にも属さない「フリーランス神主」と称しています。東日本大震災の被災地を巡った鎌田さんに、震災から感じたことを尋ねました。

フリーランス神主・鎌田東二さんに聞く

神道が受けた打撃は大きいと実感しました。とりわけ、東京電力福島第一原発事故の汚染水は、神道の世界観にも深刻な影響を及ぼし始めています。

神道では穢れをはらう禊ぎが重要です。清らかな水を使い、お祈りから気持で禊ぎをして身と心を浄化させる。そんな素朴な自然信仰に立脚する精神文化の基盤が、揺り動かされた気がします。

私は、仙台市若林区から岩手県久慈市までの三陸沿岸300キロを5月2日から5日まで野宿をして自動車で巡りました。被災地で鎮魂の思いを込め法螺貝や石笛を吹

き、宮城県七ヶ浜町にある鼻節神社を訪ね、断崖を下りたところに広がる海で禊ぎをしようと思いましたが、その時、海に流れ出た汚染水が頭をよぎったのです。

かつて水俣の海が有機水銀で汚されたように、自然界の水が汚染されたことはありません。それでも私たちは、浄化作用を信じてきました。たとえ汚れた水であっても、大海を循環するうち清浄になっていく。そんな水への信頼が、いのちを再生させる禊ぎの儀式を支えてきました。

しかし、放射性物質による汚染は、これまでとは様子が違います。それは宮崎駿監督がアニメ映画「風の谷のナウシカ」で描いた腐海のイメージと重なります。有毒な胞子をまき散らす菌類の森である腐海には、防毒マスクがなければ近寄れません。そんな腐海を私たち自身がつくり、腐海ととも生きなければならなくなったのです。

多様な動植物が生息し自然の恵み多い日本列島は、風水害や地震の多い災害列島でもあります。その風土が二面性を持つ神を生み出しました。幸をもたらす「和魂」と、災いを起こす「荒魂」です。荒魂への注意を怠り、人間は文明への過信と傲慢を増長させたと私は考えています。

その思いは、仙台市若林区の津



鎌田東二さんは、大津波の跡で鎮魂の法螺貝を吹いた=仙台市若林区、須田郡司さん撮影



かまた・とうじ 1951年生まれ。京都造形芸術大教授などを経て2008年から現職。

禊ぎ通じぬ放射能汚染 / 伝統文化の絆こそ希望

波の被災地のすぐそばに残る浪分神社を訪ねて強くなりました。神社の創建は、千年ほど前に東北地方に大地震と大津波が襲った貞観年間ともされていますが、定かではありません。白馬にまたがった海神が大津波を南北に分けて鎮めたという伝承があり、いずれにせよ津波に関する社であることは疑いありません。

おそらく浪分神社をつくった先人は私たちに「この地点まで大津波が来たことを忘れるな。なにより、時として荒ぶる自然の前では人は慎み深く謙虚でなければならぬ」という警鐘を鳴らしたかったのだと思います。いわば防災のランドマークだったのでしょう。

残念ながら先人のメッセージは私たちに伝わりませんでした。これまでの文化のありようとともに、これからは原発事故の鎮魂と慰霊、記憶を後世に伝えるランドマークとしてのお祀りの方法も問われるのではないのでしょうか。

私は被災地を訪ね言葉を失い、神道の行く末に不安を感じていました。そんな時に、岩手県陸前高田市や釜石市で地域芸能の虎舞いが、地震と津波を耐え抜いてきた人々に演じられたニュースに接し、復興の息吹を感じました。

地域をつなぐ絆としての伝統文化に、震災後の未来の希望を託したい。そう強く願っています。

(聞き手・森本俊司編集委員)
◇鎌田さんの被災地レポートは大学のホームページ (http://r.okoro.kyoto-u.ac.jp/jp/eq_mirai/index.html)で公開中。